

# 若年層の経済的自立と異性交際の日韓比較分析

## Economic Self-reliance and Dating Status of Youth in Japan and Korea

曹成虎（韓国保健社会研究院）

Sungho Cho (Korea Institute for Health & Social Affairs)

sungho-cho@kihasa.re.kr

本研究の目的は日本と韓国の青年層における異性交際に影響を与える要因について分析を行うことである。

日本と韓国は結婚をしなければ子どもを生まない国であり、結婚をしなければ出生率も共に減少する。したがって、結婚というのは出生の先行指標とも言えるため、結婚をしない未婚人口が増加することは出生率を減少させる否定的な影響を与えると考えられる。ところが、結婚をするためには、まず異性との出会いが必要である。昔韓国は親同士の話合いで結婚が決まる時代もあったが、今の時代は男女が出会いお互いのことを自分の結婚相手としてふさわしいかどうか探索する期間を経て結婚を決めるのである。しかしながら、2015年の生涯未婚率は日本は男性23.4%、女性14.1%（国立社会保障・人口問題研究所、2017）、韓国は男性10.9%、女性5.0%と未婚化が持続的に進んでいる<sup>1</sup>。また、韓国の異性交際の割合は男性30.4%、女性33.2%（韓国保健社会研究院、2012）、日本は男性30.2%、女性40.9%というかなり低い水準であり（国立社会保障・人口問題研究所、2017）。このような状況では出生率の先行指数である結婚件数も増加しないことが予想される。もちろん、すべての異性交際が結婚につながるわけでないが、異性交際は結婚の条件付確率としての意味を持っている。それにもかかわらず、異性交際というイベントは韓国社会および学会においてそれほど注目されていないテーマである。なので、本研究では異性交際に影響を与える要因について類似している日本と比較して、その共通点を相違点を探ることにする。

分析結果、日本と韓国における男女間に有意な差が多数見られた。まず、異性交際の（心理的）年齢の限界は韓国男性及び日本男女は35歳前後であったが、韓国女性は30歳前後に韓国男性及び日本男女より早いことがわかった。そして、就業有無は日本男性を除く、すべてにおいて異性交際の確率が上がる効果が見られた。有業関連要因は経済的な要因と言えるが、このような要因は韓国男性が日本男性より異性交際確率に大きな影響を与えることが見出された。女性の場合は、ある程度経済的要因が異性交際に影響を与えるに対して、日本女性は経済的要因変数の中で、就業有無しか有意な変数がなかった。学歴の場合は韓国男性と日本男性の間に大きな差が見られたが、韓国男性は学歴が低いほど、異性交際確率が下がったのに対して、日本男性はむしろ増加する傾向があった。これは日本の個人事業主の特殊性からくるものであると解釈できる。すなわち、日本の個人事業主は労働時間が長く、所得もある程度高く、高卒の割合が大きいという特徴が結果に反映されているといえよう。

しかし、このような点以外に経済的な要因が日本男性の異性交際に与える影響は小さい

---

<sup>1</sup> 2015年の人口センサスデータで筆者が計算。

といえるほど大きくはなかった。その反面、韓国男性は所得及び大企業勤務等の経済的な能力が異性交際にかなり大きな影響を与えることが示された。なので、日本は経済的な要因以外の要因が異性交際に影響を与えるかもしれない。たとえば、中村・佐藤（2010）の研究が示しているように、対人関係能力等の社会心理的な側面及び価値観が影響を与えていると考えられる。

本研究の分析結果で考察すべきところは、日本女性の就業有無である。韓国男性及び女性も就業有無が正の影響を与えているが、韓国の場合は男女のすべてが経済的な要因と相関が大きい反面、日本女性の場合は有意な就業関連要因がないにもかかわらず、就業有無のみが有意な影響を与えていた。これは伝統的に職場内での女性の地位及び役割と強いかわりがあるように思われる。すなわち、1950～1970年代日本の高度成長期の家族形態はサラリーマンの夫と専業主婦の典型的な形で、このような夫婦は社内で出会って結婚することが多く、会社もそれを勘案して女性は短期及び一般職で雇用し、男性とのマッチングを念頭においていたといわれている（岩澤・三田、2005）。要するに、最近では職縁結婚が減少しているが（岩澤・三田、2005）、職を持つ女性が持っていない女性より異性に会う機会がより多いことを示唆する結果である。

本分析の限界点としては、両国の価値観に関する調査が類似していない項目が多かったので、異性交際に影響を与える価値観について十分検討できなかった点と、結婚意向と異性交際間の同時内生性を考慮できなかった点である。今後の研究はこのような点を補完し行う必要があるだろう。

#### 参考文献

- 岩澤美帆・三田房美（2005）「職縁結婚の盛衰と未婚化の進展」『日本労働研究雑誌』、535号、16－28.
- 韓国保健社会研究院（2012）『2012年全国結婚及び出産動向調査』
- 国立社会保障人口問題研究所（2017）『人口統計資料集』
- 中村真由美・佐藤博樹. (2010). 「なぜ恋人にめぐりあえないのか？-経済的要因・出会いの経路・対人関係能力の側面から」、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編『結婚の壁-非婚・晩婚の構造』勁草書房、54－73.